
MOON-4 夜叉 4 < 2 8 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 28 >

【Nコード】

N3136N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

2人を結びつけたのは、何かの因縁か。それとも、奇跡なのか。いるはずのないもう一人の帝王 九桜の姿を秀は桜の中に見た――

MOONシリーズ 第4弾 夜叉4 第1章4話目です。

1 月夜（がつや） - 4（前書き）

『WOLF MEET VAMPIRE』を読まれた方はもうおわかりですね。

1・月夜（がつや） - 4

新宿の何処かにある桜の洋館で。

2階のバルコニーから見上げる空も青く澄んでいた。

秀は、桜の元へ訪れた。

桜は白いドレス姿で藤椅子に座り、その膝の上には薔薇の花が沢山置かれていた。

全て、この家で取れたものだということを秀も知っていた。

いつもならすぐ気配を察し振り返るはずの桜は、1本の薔薇を持つまま振り向こうともしない。

「何やってんだ、桜。」

秀は背後から彼女に声をかけ、その様子を見つめた。

白いドレスの上には。

血の染みが幾つも付いていた。

「何やってんの！」

薔薇の棘を指で取っている事に気付いた秀は、彼女の手からそれを奪った。

「ああ・・・・・・」

桜はふと、現実に戻ったかのように、「秀。もうお茶の時間ね。」

「・・・・・・ってか」

秀は目を細め、その両手の血を見つめた。

「何してたんだよ。」

「お部屋に薔薇を飾ろうと思って。」

「榊に頼ればいいだろ。それに、こんな指で棘取ってどうするんだ。」

お茶どころじゃないぞ。」

「そうね。」

桜は秀を見つめ微笑んだ。少し、表情が暗い。「今、ドレス着替えて来るから、リビングへ行ってて、秀。榊もいるはずよ。」

そういつと、膝の上の薔薇を秀に渡し、彼女は自室へと向かった。
「・・・・・・」

秀は目を細めた。

それから薔薇を持って、1階のリビングへと向かう。

そこには雑誌を読む榊の姿があった。

「榊。」

秀は彼の横顔に声をかけた。「あいつ・・・桜最近おかしくないか？」

「満月が近づいているせいだろ。」

雑誌から目を離さず、榊は答えた。「満月近くになるといつもそうだ。」

お嬢がお嬢でないみたいになる。」

「満月・・・・・・ね。」

ソファに座り、天井を見つめる。

（確かに桜だけど・・・・・・何か違う。）

そう想いを巡らしている時、階上からピンクのドレスに着替えた桜が姿を現した。

「お待たせ。お茶にしましょう。」

につこり、と微笑み、「榊は後で薔薇の棘をとって頂戴。お部屋に飾るの。」

「ほらよ。」

秀は薔薇の花束を榊に渡した。「お前の仕事だろ。」

「了解。」

榊は秀から薔薇の花束を受け取った。

1階のバルコニーからも青い空が見える。

夏の風がドアの開かれたバルコニーから室内に流れ込んで来る。

「桜。」

秀はソファから立ち上がり、「今日は俺が入れてやるよ。」

と、言いキッチンへ入った。

「あら。どうしたの？」

無邪気に桜が振り返る。その指には白いテープが巻いてあった。
「指。」

秀はそう言い、お湯を沸かし始めた。

「心配してくれてるの？秀。」

桜は嬉しそうだった。はしゃいだ声が背後から聞こえてくる。

「本当は」

秀は、「これも榊の『仕事』だろ。」

「でも、珍しいわね。私に優しい秀なんて始めて見たわ。」

桜は微笑んで言った。

「俺はブラックのキリマンしか飲まないから。」

「！・・・」

桜は目を見開き、ソファで雑誌を読んでいた榊は席を立った。

無言で豆を挽き始める秀。

「お嬢。」

榊は桜の横に立った。「気にするな。」

「・・・貴方が全てを奪ったのよ、秀。」

ふいに、桜の雰囲気が変わった。

「何。」

秀は振り向いた。

そこには、確かにいつもの少女の桜。

だが・・・『何か』が違っていた。

「・・・」

秀はコーヒー・メーカーから手を離し、彼女の前に立った。

「一体、何が言いたい。」

そう秀が言った刹那、

バツ・・・

桜の右手が秀の首を掴んだ。

「つつ！」

突然の桜の行為に、「何すんだよ！」

秀は怒鳴った。

「お嬢！」

2人の間に、入ろうとする榊を、桜は、

バツ・・・

左手に宿した紅の炎を彼の胸元めがけて放った。

そのまま数メートル離れた所にある棚に榊は叩きつけられた。

「お前、榊にまで何すんだ！」

とても少女とは思えない力で、秀の首を締めあげる桜。

「君が奪ったのだよ。」

「あなたが奪ったのよ。」

混じり合う、青年と少女の声。

「あの日、君が桜の樹の下に来なければ、私は和人を手に入れる事が出来た。」

「和人・・・」

「私は貴方をずっと待ってたんだから。」

あどけない少女の瞳は・・・金色とビリジアン・ブルーを混ぜた『闇色』の瞳。

「くっ・・・！！」

秀の首を締め付ける手に力がこもる。

「君さえいなければ。」

「貴方だけをずっと待っていたのに。」

「・・・」

（何て力だ・・・！！）

秀は意識が薄れて行くのを感じた。

「お嬢！」

榊が飛びより、秀の首を締めあげる桜の手に自分の手をかけた。

バツ・・・

炎が・・・小さな炎がその手に迸る。
ふいに。

桜の手が緩み、秀は床にしゃがみこみ、咳をした。

桜は倒れそうになる所を、榊の腕に支えられた。

その胸元で、

「あら、どうしたの？」

いつもの桜に戻った。

「どうしたの・・・って。」

秀は咳をこらえ、「お前今、俺を殺そうとしたんだぞ。おまけに榊まで。」

「え？」

桜は大きな目を一層大きく開き、「どうしたのかしら・・・
・覚えてないわ。」

「確かに、九桜を倒したのは和人の方だ。」

秀は言った。「だが、それは九桜が『光^{ひと}』をも制しようとしたからだ。当然。」

彼の台詞に、2人は目を見開いた。

「秀？」

小首を傾げる桜。「どうしてそれを？」

「どうしてって・・・」

秀は言葉に詰まった。

今、『全』てが判ってしまったから。

「・・・榊。」

桜は榊を見上げて言った。「何か、頭が痛いの。」

「『^{エナジー}血』の使い過ぎだよ。帝王のかけた結界の中にまた結界を張っているから。」

「そう。」

「ベッドに運んであげるよ。」

榊は桜を抱き上げ秀を振り返り見た。「お前も来いよ、秀。」

「・・・・・・」

歩き始めた榊の後を無言で追いかける秀。

2階の一番奥にある桜の部屋で、

「ゆっくり休みな、お嬢。」

榊がそう言うと、

「うん。でも」

ベッドに横になり、「榊も秀も私の側にいてね。何処へも行かないでね。」

視線は特に秀へと向けられていた。

「ああ。」

秀は答えた。

その様子を見ると安心したかの様に、桜は深い眠りに就いた。

1 月夜（がつや） - 4（後書き）

続きをお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136n/>

MOON-4 夜叉 4 < 2 8 >

2010年10月9日16時05分発行